

2021 年度 ソニー幼児教育支援プログラム
保育実践論文

「こころ豊かな子ども達をめざして」

～「ときめき」から「ひらめき」そして「きらめき」へ～

新浜保育所 2 歳児の取り組みから



旧 芦屋市立新浜保育所（現 芦屋市立西蔵こども園）

目次



- I はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- II 科学する心のとらえ方・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- III 実践報告
 - ① 虫さんと仲良しになったよ・・・・・・・・・・ 2
～ダンゴムシ・ゴマダラカミキリ・セミ・アオムシ～
 - ② カマキリさんこんにちは・・・・・・・・・・ 7
～ハラビロカマキリ・チョウセンカマキリ・オオカマキリ～
 - ③ 生活発表会～20匹のカマくん～・・・・・・・・ 18
- IV 考察に基づく課題, 今後の方向性・・・・・・・・ 19



I はじめに

芦屋市立新浜保育所は、芦屋市南部の埋立地内の閑静な住宅街に立つ保育所である。保育所の前から、遊歩道を通して近くの海や公園まで安全に散歩に出かけることができ、近隣の公園は、自然が多く、四季を通じてたくさんの生き物、草花に触れることができる。また園庭は日当たりがよく、子ども達が思う存分体を動かして遊ぶことができ、花壇や畑では季節の草花や野菜を育て、食育活動にも力を入れている。春にはチョウ、アオムシ、夏にはカマキリ等の小動物に出会える豊かな自然環境にある。

2020年度は新浜保育所として最後の年になり、2021年4月には芦屋市立幼稚園と統合、現在地から北西に700mほどの住宅街に移転し、『芦屋市立西蔵こども園』に新しく生まれ変わる。

芦屋市では「“いのち”を大切に、生きる力の基礎を育む」理念のもと、「あ あかるく元気な子ども・し しっかり考え合う子ども・や やさしい子ども」を目標に教育・保育を行っている。

新浜保育所最後の年となる2020年度は、所内外の自然環境を最大限に生かし、子どもがたくさんの生き物や植物に出会い、自ら親しみ、触れ、気づき、興味をもつ中で、発見したり、驚いたり、考えたり、感動したりしてほしいと考えた。またそこから、こころ豊かな子ども達に育ててほしいとテーマを設定した。

II 科学する心の捉え方

子ども達は、様々な生き物に出会うと、「うごいた。(見て気づく)」「かたい。(触って気づく)」「いいにおい。(匂って気づく)」等「あれ？」と気づく。そして、その『気づき』は、「どうして？不思議だなあ」「これ、おもしろい！」と子どもの興味・関心の扉を大きく開き、心が動く『トキメキ』へと変化し、そしてその『トキメキ』は、「やってみよう！」「(こうすると)どうなるのかな？」等、工夫・試行錯誤の『ヒラメキ』へとつながる。

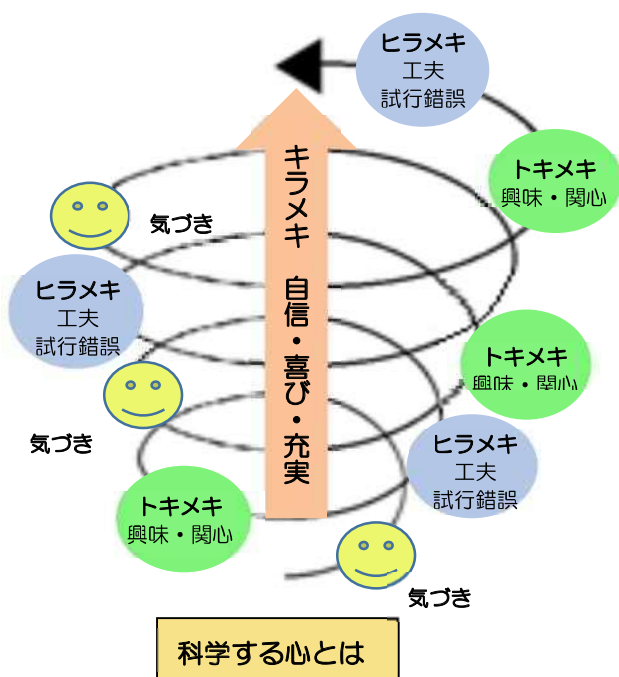
やがてその『ヒラメキ』は「できた！」「やったー！」「そうなんだ」と深い学びとなり、自信・喜び・充実に満ち溢れた輝き『キラメキ』へと変わっていく。

私達は、その過程の中で育まれていくものこそが、『科学する心』だと考えている。

しかし、日常の中にたくさん出てくる『気づき』がすべて『トキメキ』へとつながっていくと言えるのだろうか。『気づき』が、『気づき』のままで終わってしまうこともあるのではないか。

また、子どもの『気づき』が『トキメキ』に変わる際、何らかのスイッチ(=きっかけ)があるのではないか。

その2点を2歳児の活動から見ていくことにした。



Ⅲ 実践報告

① 「虫さんと仲良しになったよ」 4月～7月

～ダンゴムシ・ゴマダラカミキリ・セミ・アオムシ～

2020年度2歳児20名でクラス運営が始まる。しかし間もなく新型コロナウイルス感染症に対する緊急事態宣言により4/16～5/23（延長期間を含む）までは登所自粛を要請した特別保育期間となり登所児童が激減する。6月になってようやく平常の運営形態に戻ってきたとはいえ、気持ちが不安定になりやすい子どもが多く、安心して過ごせる居場所を提供したいと考えた。子ども達の大好きな小動物や植物に触れ親しみ、自ら様々な遊びに興味をもち、学び、考えるようになってほしいと願い、池の金魚にエサをあげたり、ダンゴムシ探しをしたり、身近な小動物に触れることから始めた。すると、それを楽しみにする子どもが増え、徐々にダンゴムシに興味をもち始め、見つけたダンゴムシの飼育が始まった。

トキメキ…興味・関心

ヒラメキ…工夫・試行錯誤

キラメキ…自信・喜び・充実

👉…気づきのスイッチ

📄…事例の考察

👉…子どもの姿の読み取り

👉…保育者の援助・配慮

下線…全体の子どもの読み取り

<事例1> “手にダンゴムシを持って” ～A児の姿から～



A児はとても元気があり、楽しいことが大好きだが、初めての集団生活に緊張していた。登所しやすいようにと保護者がA児の思いを受けとめ、毎朝色々なところに立ち寄ってから登所していた。**トキメキ**

ダンゴムシを飼い始め数日が過ぎたある日、A児が手をしっかり握りしめ登所してきた。保育者：「おはようございます！」

A：「……ん」手を差し出したのでどうしたのか尋ねてみた。

A：「……」手をそっと広げると、その手の中にはダンゴムシが入っている。**トキメキ**

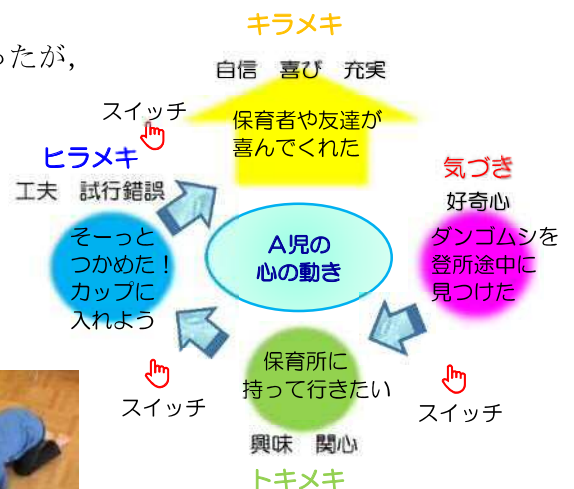
保護者：「保育所に持って行って聞かないんです」

保育者：「わあ！ありがとう。ダンゴムシのおうちに入れてあげる？」

A：「(にっこり)」**キラメキ** そのまま走って部屋に行き、ダンゴムシの家へ入れた。

すると自然と友達が集まり一緒にダンゴムシを観察していた。

2歳児クラスの春ということもあり会話にはなっていなかったが、自分が自分と押し合いのぞき込む姿や、頭を突き合わせニコニコと顔を見合わせる姿があった。



<事例1の考察>

動く虫を捕まえることが大好きだったA児。**トキメキ** 見つけたダンゴムシに友達に関心をもち、毎朝捕まえたダンゴムシを持ってきてはダンゴムシのお家に入れることも楽しく、それをきっかけに友達が集まって来ることがうれしくなったと考える。**キラメキ** また、A児の思いを受け止め、一緒に虫探しをする保護者の姿がA児の生き物に思いを寄せていく後押しになっている。



大人が小さな生命を大切にすることで、子ども達にも世話をする事の大切さを知らせた。

<事例2> “せみのお洋服”

セミの鳴き声を数日前から耳にしていたA児が、「近くにおるで〜」と走り出した。「どこで鳴いてるのかな？ちょっと見に行ってみよ！」と周りの子ども達に声をかけ鳴き声をする方へ一緒に向かった。

A：「先生〜これ〜」とセミの抜け殻を見つけて、見せてくれる。

保育者：「これ何かなあ？」

J：「・・・何か分かんないよ〜」

A：「これ抜け殻やで」

保育者：「え？何の抜け殻なの？」

A：「セミ〜」

保育者：「抜け殻ってなあに？」

A：「セミが“ん〜”って脱ぐねん」

保育者：「なんかお洋服みたいだね」

A：「これ、めめ」「これ、てて」「これ、あし」と抜け殻を手にして、部位をみんなに知らせ、喜んでくれたことが嬉しくてセミがどんどん好きになった。

友達同士で刺激し合い、徐々に見たい、触りたいと思う気持ちが広がっていった。



<事例2の考察>

A児のセミ好きがみんなに伝わっていった。**トキメキ** 初めて抜け殻を見た子どもや、抜け殻を夢中で探して集める子どももいる。**ヒラメキ**

「これ、めめ」「これ、てて」「これ、あし」とA児が抜け殻を持って部位を教えてくれたことがきっかけで、触ることが出来ない子どもも、見たい気持ちが強くなり「見せて」「見せて」と集まってきた。

トキメキ

低い木にとまっているセミを積極的に捕まえに行き、周囲の友達から一目置かれるようになったA児はある日、みんなで虫取りに公園へ行った帰り、道端に転がっているセミを見つけた。A児はふと立ち止まり、セミを見ると次の瞬間セミを蹴飛ばした。するとセミは羽をばたつかせて動き出した。

A：「あ！！ちんで（死んで）ないわ」と蹴飛ばされて羽をばたつかせたセミに一言そう言い、また歩き出した。

セミが大好きなA児が、セミを蹴るという行為に保育者としては正直驚いた。A児はただ死んでいないことを確認したかっただけなのか、A児がどのような気持ちでセミを蹴ったのか図りかねた。しかし、保育者側から見ると、“それなら手で捕まえてみればいいのに”と思ったが、今回は声をかけずこれからのA児の生き物との関わりを丁寧に見ていくことにした。

動いてるなあ



歩いてるわ

おもしろそうだなあ
けど...ちょっとこわいなあ



捕まえたセミや

最初は動く虫を見つけると、悪気も罪悪感もなく、草を踏みつけるように靴で踏みつけていたA児だが、育てているダンゴムシには興味がありよく見ていた。**トキメキ** その時も手で強く持っでしまい指でつぶしてしまうことがしばしばあった。その度に落ち込んでしまうが、触りたい気持ちの方が強く、関心度は増し、少しずつ力を加減して、優しく握めるようになっていった。**ヒラメキ** そしてうれしくなって毎朝ダンゴムシと一緒に登所するようになっていく。**キラメキ** 捕まえることが上手で積極的に探しに行くA児にあこがれる子どもの姿もあった半面、つぶしてしまうことも多く、友達に注意される姿もあった。つぶさないように触るにはどうすればいいのかを、虫たちとの触れ合いの中で体得してくれればと虫と関わる機会をもつようにした。**ヒラメキ**

<事例3> “しぜんのそうじやさん” ～B児の姿から～

B児は、友達と一緒に遊ぶことよりも、ひとりで好きな遊びをすることが多かった。クラス保育に参加はするが、B児の一人遊びを見守りながらも友達と共感できる遊びはないかと考えていたところ、友達が虫探しをしている姿を見て、B児も虫探しをするようになった。そこで、ダンゴムシに興味をもち始めたので、より関心が深まるようにと、保育者や友達と一緒にダンゴムシの家を作ったことをきっかけに、ダンゴムシに夢中になっていった。

ダンゴムシの絵本や図鑑を用意し、保育室の真ん中に飼育コーナーを設けた。子ども達がダンゴムシを自由に見たり触ったりできるようにした。

B:「ホントに何でも食べるのかな？」B児と一緒に色々な物（夏の収穫物・画用紙・花・葉っぱ・木の枝・松ぼっくり等）を入れてみる。**ヒラメキ**

B:「あ！！食べてる」「黄色の紙は食べないね」「これ（赤い花びら）好きなんやあ」と毎日のぞき込み関心が深まっていった。**トキメキ** 担当がきゅうりの葉っぱを剪定しているとB:「きゅうりの葉っぱ食べるかな？」保育者:「食べるかな？あげてみる？」と葉っぱを差し出し入れた。次の日きゅうりの葉にたくさん細かい黒い物がのっていた。

B:「土かな？」「黒いのウンチ？」「ウンチや！！」「いっぱいやなあ」**キラメキ** 画用紙片を入れてからは、毎日飽きることなく見ていた。

紙はやっぱり
食べてないねえ



コンクリート片

黄色の画用紙



保育者や友達と一緒にお家を作ったことで大きく気づきのスイッチが入り、トキメキ始めたB児。👉B児が『知りたい』と思うことが増え、友達と一緒に絵本を読んでダンゴムシが何でも食べることを知り、入れてみたいと思うエサは全部入れてみることにした。すると毎日「葉っぱに穴が開いてる！」「石(コンクリート片)にいっぱいついてる！！」「他に何を食べるか試してみよう」「これ！うんちやあ」**ヒラメキ** 等コンクリート片や葉っぱに密集しているダンゴムシの様子を見て驚き楽しくなり、気づきからトキメキにスイッチが入る様子が手に取るようになった。

👉**トキメキ** そんな様子が20人に広がっていった。**トキメキ** B児はダンゴムシが何を食べるのかと関心が深まり、入れた物にダンゴムシが集まって来る様子を見て驚き、次は何を食べるかに興味が増らんでいった。**ヒラメキ**

さらに最初は土だと思っていた物がうんちだと気づき、より関心が深まった。

いろんなものをたべる
“しぜんの そうじや”



へえ そうなんだ！

参考文書

『ぼく、だんごむし』

得田之久 ぶん たかはしきよえ え

<事例4> “キュッキュッ”

何の音かな



2匹のカミキリムシと出会い、飼育することになる。始めは模様や触覚の長さに目を惹かれた子ども達は、毎日観察するようになり、図鑑で調べ樹液を食べることを知り昆虫ゼリーをあげることにした。

ある日カミキリムシの飼育ケースから“キュッキュッ”と音がしていることに気づく。

B:「何の音かな?」とB児の投げかけで鳴き声だと思い「キュッキュッ」と真似をし始めたと同時に、黒い粒がたくさんケースの底にある事にも気づいた。

B:「これ何?これウンチちゃう?」カミキリムシの姿かたちだけでなく毎日

ケースを見ていたので他のことにも関心が生まれてきた。**トキメキ** 鳴き声を真似ながら飼育ケースの、うんち(プラスチック片)と一緒に掃除し世話をした。数日後、いつものように掃除をしていると、飼育ケースのふたの回りがギザギザになっていることに気づく。

B:「…(じっと見つめる)…何?これ…」他児も集まり始め皆でふたを見る。

トキメキ “うわぁ…ギザギザやん…”と恐る恐る見てみる子どもや、触つ

てみようとする子どももいた。**トキメキ** その時はなぜギザギザになっているのか分からなかった。観察を続けるうちに、カミキリムシがふたを噛んでいるところを見た。実際にギザギザな部分を触り、ふたを噛む様子を見て噛む力が強いことを知る。「ふたを噛んでいるから、ギザギザになるんや」「噛む音が“キュッキュッ”なんや」とわかり、より関心が深まったと考えた。

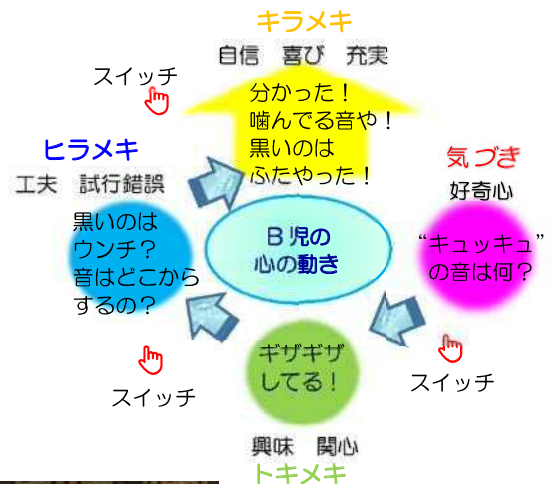


ギザギザやん!



ある日一匹のカミキリムシが動かなくなかった。子ども達は動かなくなかったカミキリムシをじっと見ていた。虫の死に対して、『動かなくなかった』と事実を感じ取った様子だった。

B:「死んじゃったんかな?」と不安そうにつぶやいた。しばらくすると、もう一匹も弱っていき、子ども達と話をし食べ物に困らないように、昆虫ゼリーを入れてふたを開けた飼育ケースを畑に置いておくことにした。逃がすことを嫌がる子はいなかったが、しばらくはケースをながめて気にしており、いなくなった様子を感じ徐々に関心が無くなっていったようだった。



<事例5> ウンチいっぱいするなあ

春には全く見つけることができなかつたアオムシを、秋に子ども達が偶然見つけ飼うことにすると、毎日食い入るように見ていた。**トキメキ**

B:「ウンチいっぱいするなあ」「むしゃむしゃ食べてる」「すぐ葉っぱ無くなるなあ」「あ!!またウンチしたあ アハハ」友達と笑いあう様子が見られるようになった。**キラメキ**

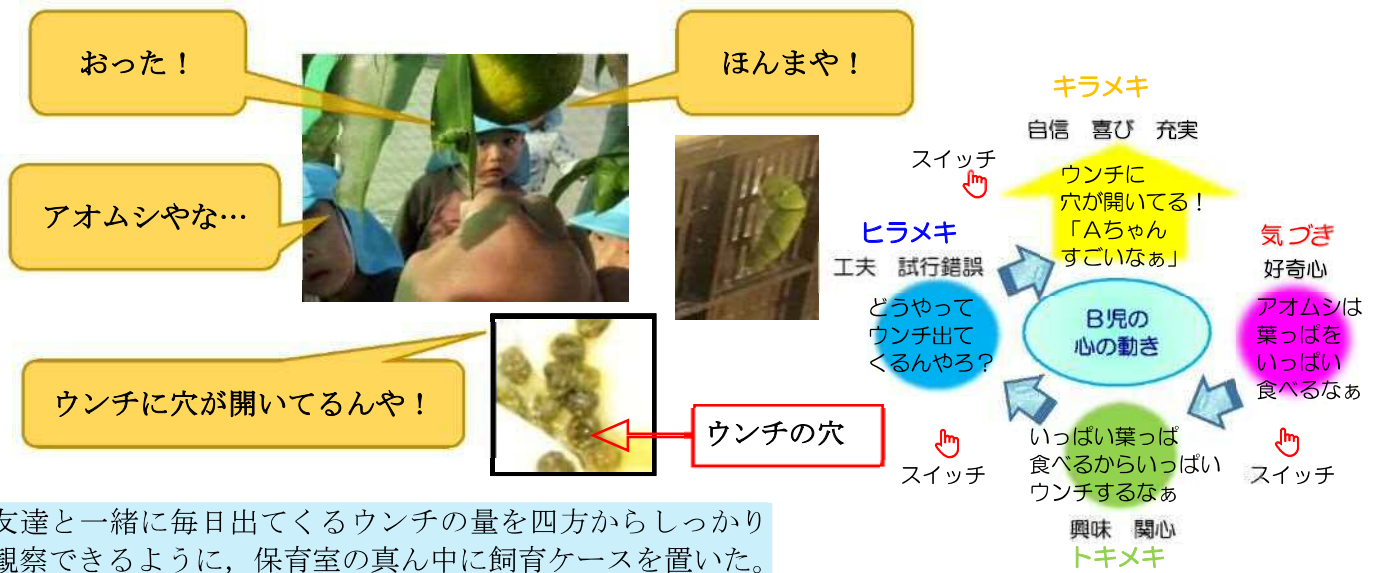
ある日、ゆずの枝を入れている花瓶の中に落ちているウンチを見て何かに気づいた。

B:「せんせい~この穴なに?」と不思議がる。“何かな?”と一緒に見てみると、ふやけて大きくなったウンチには穴が開いていた。

B:「ウンチに穴が開いてるんや」**トキメキ** と、B児の関心は深まり再びスイッチが入った。👉

周りの友達もなんで穴が開いているのか?目はどこか?新幹線みたいや!等B児のトキメキが他児へ広がっていった。





友達と一緒に毎日出てくるウンチの量を四方からしっかり観察できるように、保育室の真ん中に飼育ケースを置いた。

たくさん葉っぱを食べて小さかった黒のアオムシから緑のアオムシへと、大きくなっていく様子を毎日見ていた子ども達。トキメキ 動かなくなったアオムシをじっと見て、B:「チョウチョになる準備しているの?」と話してチョウになる日を楽しみにしているようだった。ヒラメキ また、穴の発見には保育者も驚かされた。毎日よく見ているからこそその発見だと本当に感心した。B児の気づきをしっかり認めると、とてもうれしそうで恥ずかしそうにしていた。キラメキ B児が友達から“すごいな”と感じられ始めたきっかけとなった。

<事例3~5の考察>

保育者や友達と一緒にタライに土を入れダンゴムシの家を作ったことをきっかけに、自ら見に来ては友達と一緒に過ごす時間が増えていった。トキメキ ダンゴムシの話をおうちの人に聞いてもらうだけでは満足できず、友達に話したくなった。ヒラメキ 触ることは苦手だが毎日飽きることなく飼育ケースをのぞき込みよく観察し、色々なことに気づき、そしてその気づきを友達に伝えたい気持ちが膨らんできた。トキメキ 積極的に捕まえることはしないが、ダンゴムシのことを知りたい気持ちが伝えたい気持ちに変わっていった。

ダンゴムシをはじめとし、カミキリムシ・アオムシと毎日飽きることなく飼育ケースを覗き込むB児。トキメキ そして友達と一緒に見たり、気づいたり、図鑑を覗き込んだりすることが楽しくなってきた。ヒラメキ また毎日の出来事をおうちの人にも聞いてもらうことで、より関心が深まっていったと考える。キラメキ そしてB児の中でトキメキ(興味・関心)とヒラメキ(工夫・試行錯誤)が色々な場面で繰り返され、心が動かされている様子が手に取るように分かった。また友達と一緒に気づきを共有できたこと、そして認められたことが、B児の自信につながったと考える。気づきのスイッチをきっかけに友達と一緒に楽しむことが増えていった。

<①の取り組みを振り返って>

ダンゴムシとの出会いから虫が好きになり、それ以降多くの虫たちに触れ親しんできた。ダンゴムシの飼育を通して、小さな生き物は「雑に扱うと死んでしまう」ことに気づいた。カミキリムシは死んだら動かなくなるということを知った。セミは「逃がしてあげないと、すぐに死んでしまう」と友達に声をかけ、自分なりの方法で生死の確認をする子どもがいた。その都度、子どもの気づきに寄り添いながら、小動物を大切に飼育することで自然の面白さや不思議さを子ども達が肌で感じていく様子がみられた。

秋に見つけたアオムシは、色や形が、変化していく変態にも気づき、「チョウチョになる準備をしている」と、春に出会えることを楽しみにしている。

様々な小さな虫を飼育していくことで、一人一人が「見て」「気づき」「感じ」心を弾ませている様子がみられた。また、生命についても、漠然とではあるが、『生きている=動いている・死んだ=動かない』という事実を捉える等、虫に思いを寄せることで2歳児なりの生命の学びがあったと感じる。そして、言葉の発達が見られるようになると、その学びを友達と共有し、友達との会話の中でさらに興味や関心が膨らんでいったと考える。

② 「カマキリさんこんにちは」 7月～11月 ～ハラビロカマキリ，チョウセンカマキリ，オオカマキリ～

＜事例1＞ あ！ひまわりの葉っぱに・・・

畑でバッタ探しをしている時に、ひまわりの葉の裏にカマキリがいることに気づき、飼育ケースに入れる。子ども達が次々と飼育ケースを見にやって来てのぞき込む。

B：「それ、カマキリっていうんだよ」

F：「あ！こっち見てる」

J：「なんかこわいー」

E：「目がおっきい」

G：「手がギザギザ！」と、口々に言い子ども達はカマキリに釘付けになった。**トキメキ**
中には、生まれて初めてカマキリを間近で見た子どももいて、驚いていた。

保育者や友達と一緒に、図鑑でカマキリについて調べる。生きた虫を食べることや共食いをすることが書いていたので、そのことを子ども達に知らせる。そして、今日捕まえたカマキリは、“ハラビロカマキリ”という名前でも背中白い点があることが特徴だと分かった。

その後、クラスで飼育することになる。

B：「草食べるんちゃう？」と草をたくさん入れてみた。**ヒラメキ** 食べるのかどうか、じっと見ている。

トキメキ 保育者と一緒に図鑑と実物を見比べ形や模様等の特徴を確認し、子どもが生きている虫を食べることを知る機会となった。

A：「先生～クモいるで～捕まえる」

捕まえようとしたが、力加減が分からずつぶしてしまった。

J：「あーあ。Aちゃんがつぶした～」と、J児の言葉にA児は泣いてしまう。保育者が、「捕まえてあげようって思ったんだよね。」と言うとA児は泣きながらうなずく。

A児はその後もう一度クモを見つけ、捕まえようとする。**ヒラメキ** つぶさないようにと気をつけながらなので、何度も逃がしてしまう。

D：「Aちゃんががんばれ～」と声援をたくさん受け、クモを追い続け、ようやく捕まえることができた。**キラメキ**

F：「ヤッター！！Aちゃんってすごいな」と周りの子どもも喜ぶ。**キラメキ** 早速ケースに捕まえたクモを入れる。

すると、F：「なんかゆらゆらしてる」と子どもがカマキリの動きの異変に気がついた。**トキメキ**

子ども達が見ていると、カマキリの上半身がユラユラと左右に動き、一瞬でクモを捕まえて食べ始めた。**キラメキ**

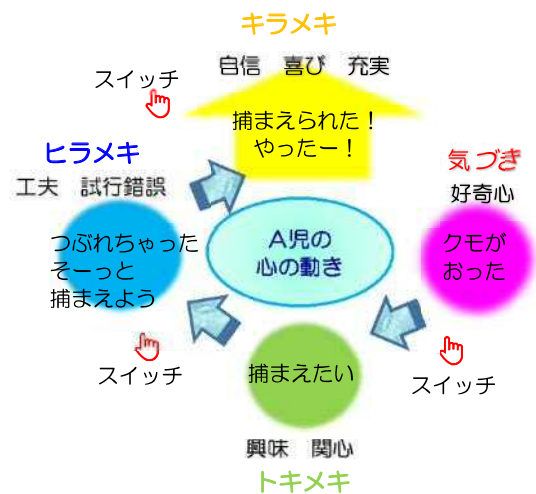
B：「クモさん…」とB児はカマキリの捕食を見た瞬間、ビクッと驚き動けなくなり涙ぐんでいた。“こわい”“かわいそう”“どうなっちゃうの”等の気持ちが入り混じっていた。言葉では理解していたもののB児は初めてカマキリが生きた虫を食べている光景を目にし、あまりにも衝撃的だったようだ。

保育者としては、その後すぐに降所したB児にその場でフォローができなかったことが気になった。

後日、保育者が休日に捕まえたハラビロカマキリを見せると、B児が「友達？」と言う。「一緒のお家入れてあげる」と2匹一緒に飼うことにした。**トキメキ**

背中白い点を見て、同じ種類だということが分かったようだ。更にしばらくの間、同じケースの中で過ごしていたため、ますます仲良くなったと思った様子だった。

B児は、2匹のカマキリを見て“友達”とイメージしたようで、先日の恐さは少し和らいだ様子だった。気づきからトキメキに変わる時が一番大きなスイッチとなったと考えた。



ゴキブリやムカデも素手で捕まえようとするA児。保育者が思わずとめると、キョトンとした表情を見せる。日常の中で害虫（蚊等）を大人が殺生する様子を見る機会はあるが、虫が好きな子どもにとっては、毒虫や害虫等関係がない。大人の感覚で触っていい虫、触ってはいけない虫、つぶしていい虫、つぶしてはいけない虫等、その都度子どもを静止することが子ども達にとって本当に良いのか保育者間で迷い話し合うこともあった。結果、毒虫や害虫等、体に害を加えるような危険な虫は触ってはいけないことを伝えていくことにした。

春の頃はとにかく動く虫を見ては、踏んだり手でつぶしたりというA児の姿があった。しかし、夏の終わり頃には、小さな虫でも力を加減して優しく掴まえられるようになったが、この時はクモがこれほどにまで柔らかいものだと分かっておらず、本当につぶすつもりはなかったが、つぶしてしまい肩を落とした。またその瞬間を友達に見られていたこともショックだったようだ。

しかし、友達の声援と共に注目も浴びたことで、失敗を繰り返しながらも捕まえることができた瞬間にA児のスイッチが入った。👉

そして、その喜びは大きく、得意な表情と満面の笑みを浮かべていた。根がとても優しい性格のA児が虫の飼育を通し、虫が大好きになり愛情をもち始め、思いやりが芽生えていく。春の頃とは違い、歩き方がぎこちない虫を見てはそっと端に寄せてあげたり、雨が降ってきてはぬれない場所に移動させてあげたりと、虫に対する愛情が深まっていった。また、捕まえた虫を、放っておくのではなく、元いた場所へ逃がしてあげる姿が見られるようになった。周りの子ども達も、「Aちゃん捕まえて」と頼りにし、「これ何？」とA児に聞くことはA児の自信につながっている。

<事例2> くさいのにねえ・・・

朝、テラスにいたカメムシを見つけたA児が捕まえてケースに入れる。その他クモ、バッタも次々入れる。A児は、先日も捕まえたので我先に捕まえてはケースに入れた。トキメキ

カマキリが虫を食べる動きよりも捕まえる動きに関心が深かった。

クモの捕食を見た子どもが『どうなるんだろう？』『食べるかな？』と興味を持って集まってくる。ヒラメキ

B:「バッタ食べるかなあ」

D:「あ、クモさんもういない。カマキリが食べたから。一気に食べてる」

E:「一気に食べてるね」

D:「逃げようとしてる。カマキリやめてって逃げようとしてる。てって（手）ではさまって逃げようとしてるークモさんが」

B:「（え～カメムシって）くさいのにねえ」

E:「これ(カメムシ)食べたらお腹痛くなっちゃうよねえ」

B:「見て。いっぱい食べてる。おいしいのかなあ。見て。全部食べてるね」

D:「アムアムアムアムって食べてるね」と、子ども同士の会話が広がった。トキメキ

他児も寄って来て飼育ケースに鼻を寄せ、臭いを嗅ぎ始める。「くっさ～!!」「めっちゃくさい」と、顔を見合わせて笑う姿があった。

子ども達は保育者や友達と気づきを共有しながらカメムシとカマキリの動きをじっくり観察している。共有することでさらに興味を増していく様子が見られた。

また、大人の感覚とは違い、2歳児の子どもにとっては臭いことが面白く魅力的だったのではないかと感じた。捕食しているカマキリを見て、“もっと知りたい”と気持ちが強くなっていったと感じた。

子ども達が自ら起こしたトキメキ(興味・関心)に共感していく。そして、子どものつぶやきに共感しながら大人も一緒に気づいたことを伝え、子どもの思わぬ気づきをしっかり認めていく。

子ども達の気づきが「なにになに?」「どこどこ?」とクラス中に広がり、どんどん捕食に興味が高まっていく。トキメキ エサを見つけた時のカマキリの反応や、捕まえる瞬間が面白いのではないかと。

ところがある日、ハラビロカマキリが1匹になっていることに気づく。一緒に探してみるが、見つけれない。「(カマキリが)食べたんちゃう?」「赤ちゃんいるのかな?」「お腹痛いって言ってるんちゃう?」等、考えたこと、思ったことを言い合う。ヒラメキ



<事例3> あ、そうかあ～



カマキリが捕食しようとしている場面を真剣に見ながら、仲良しの2人が会話していた。

C:「近づいてる～」

D:「歩いて(きたら)食べられる。歩いて(きたら)食べられる」

C:「なんで～？」

D:「お腹空いたからよ」

C:「あ！そうかあ！」と二人で共感した瞬間だった。

子ども同士で色々と考え、想像を膨らませている時には、そっと見守り子どもと同じ目線になることで新たな発見を拾っていった。

何気なく見ていたC児と、カマキリの気持ちになり見ていたD児の会話をきっかけにC児も虫の気持ちになりカマキリをよく見るようになっていく。

その後散歩で近隣の公園に出かけ、トンボやバッタをたくさん捕まえた。

B:「カマキリ、トンボも食べるかなあ？」と言うので、皆でトンボを入れるのか相談をして飼育ケースに入れることになった。**ヒラメキ** 一瞬でトンボを食べたので、保育者も子ども達もとても驚く。食べている様子を釘付けになっていると、カマキリがトンボの羽だけを落とす様子に気づいた。

C:「羽も食べないとだめだよねえ」と少し悲しそうな表情を見せる。C児は食べ物(トンボ)を粗末にしてはいけないことを感じているようだった。カマキリの命も大切に思い、トンボを入れることに納得していたが、食べられる様子を見ながらトンボの命も大切に思ったのではないかな。

B:「なんで羽食べないのかな？」とC児のつぶやきとほぼ同時に疑問をつぶやいた。**ヒラメキ** “おいしくないのかな？” “嫌いなのかな？” と、子ども達と色々予測してみた。

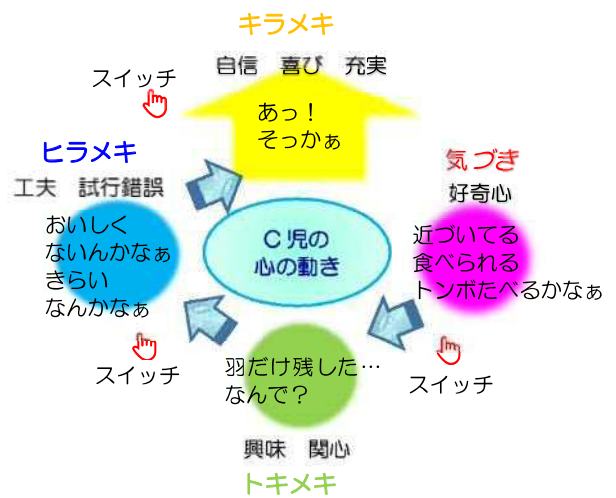
その後、C児が畑で自分が捕まえたバッタを喜んでケースに入れた後、カマキリが早速食べ始めた時には

C:「最後まで食べてー！」と叫びながら、最後の足1本まで食べる様子を長い時間見続けた。

C:「全部食べてくれた」と保育者にうれしそうに話す。

虫を捕まえては、カマキリの飼育ケースに入れ捕食する場面を見てきた中で、“クモが大好き” “トンボやチョウの羽は食べない” “頭から食べる” “食べた後は、カマを磨く” 等、様々なことを発見する。

保育者も子ども達も飛んでいる虫を食べるとは思っていなかったもので、驚いた。食べられていくトンボの気持ちや食べているカマキリの気持ち等を子ども達と共有する。「先生エサ捕りに行こう」「畑行こう」「虫探しに行こう」という“もっと！！”の気持ちが続くように保育者も子ども達の意欲に寄り添うことを心掛けた。



これまで、C児は虫が大好きで興味があったというより、何となく皆が集まっているところにいるという感じだった。しかし、『なんで?』と思っていたことがD児との会話を機に『あ、そうか!』と心が動き、その瞬間にキラメキへのスイッチが入った。👉自分と置き換えて虫の気持ちになり【擬人化】お腹が空いているならエサをあげたいという思いが湧いてきた。**ヒラメキ** 羽だけを残すカマキリを見ていた時に、トンボの気持ちも感じたC児だからこそ、次に自分がバッタを入れた時には「全部食べてー」と叫ぶ程、体に力が入っていた。最後まで食べた時には、本当に嬉しそうだった。この時から更にC児は虫への関心が大きくなり、飼育ケースをのぞき込む時間が多くなった。**トキメキ**

<事例1~3の考察>

今回子どもから出た言葉「カマキリがお腹すいてるからよ」のように、自分の感情をカマキリに投影することが増えてきた。「あ！」の気づきと同時に初めて見た“これは何？” **ヒラメキ** “分かった！” **キラメキ** 等様々な思いを抱いた表情を浮かばせ、カマキリへの思いを寄せていき愛情が膨らんでいった。「明日も保育所で虫探しがしたいな」「先生と友達と何捕まえようかな」と子どもの心が動き始め、それが他児にも広がっている。**トキメキ** その中で、保育者も驚かされる2歳児の気づきや推察がたくさんある。衝撃を受けた子どももいるが、獲物を捕獲する瞬間のリアルな姿に魅力を感じ興味や関心を寄せ始めた。また子ども同士の会話の中で分かったことが興味や関心のスイッチとなりキラメキへとつながった子どももいた。

それは“小さな生命との出会い”を通して、^{いのち} どんどん虫に思いを寄せていくからだと考えられる。

<事例4> 「くっさ〜」 カマキリ会議 ①

生き物には全て“生命”^{いのち}があることを伝えていきながら、あらゆる“生命”^{いのち}を大切にしたいという願いをこめた。

保育者の家で飼っていたカマキリが亡くなり、子どもに見せた。子ども達と亡くなったカマキリを一緒に見る。一番前で見えていたA児が「くっさ〜」と言う。**トキメキ** 他児も次々と「くっさ〜」と鼻をつまむ。「本当だね。死んでしまったら臭くなるのかな？」と保育者が返すと、B児が「目が黒い〜何で黒いん？」「かわいそう…」とつぶやく。**ヒラメキ** 目が黒くなっていることを皆で確認する。**トキメキ**

保育者が手でつまんで間近で見せていくうちに、首がちぎれて頭が落ちてしまったことが子ども達にとっては衝撃だった。手や足もどんどんちぎれていく様子も目にし、子ども達は「あっ(落ちた)」「あっ(取れた)」と眉をしかめながら見る。

ヒラメキ

生きていたカマキリは“動く”，死んでしまったカマキリは“ぜんぜん動かない”ことに気がついた。

保育者が「お家に帰してあげようと思うんだけどどう？」と聞くと、H:「お家にかえしてあげたらいい。1人やったら淋しいから」と言う。「じゃあ、カマキリのお家ってどこかな？」と聞くと、H:「木とか、草があるところ」と、絵本や実際見つけた場面を思い出しカマキリが居る場所を言う。**ヒラメキ**

この日は雨が降っていたため、保育者が2歳児室前のテラスに埋め、子ども達は一緒にお墓を作ることができず残念だった。

動かないカマキリを見て、生命がなくなったことを理解できる子と、ただ動かないことを不思議に思う子、様々な様子だった。 長い期間カマキリと過ごし思いを寄せてきた子ども達だったので、カマキリムシやセミの死とは違う感覚を抱いたようだった。



<事例5> チョウセンカマキリが仲間入り



新しく保育者が捕まえたチョウセンカマキリが仲間入りする。

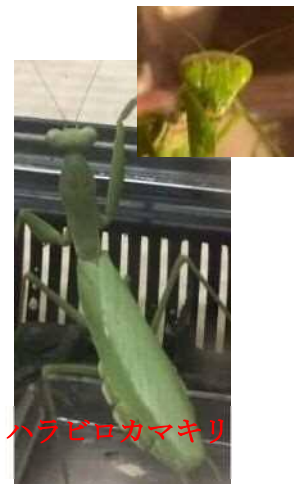
B:「なんかちがう」

保育者:「どこがちがう？」

B:「(体が)ながーい」と目を丸くする。周りにいた友達も違う所を探し始める。

C:「お顔もちがう」 **トキメキ**

B児やC児の気づきを他児にも広めるように働きかけた。そして、毎日子ども達が飼育ケースをのぞく度に新たな発見や、感じたことをつぶやきがあり、耳を傾けながら、保育者も一緒に心をとときめかせた。

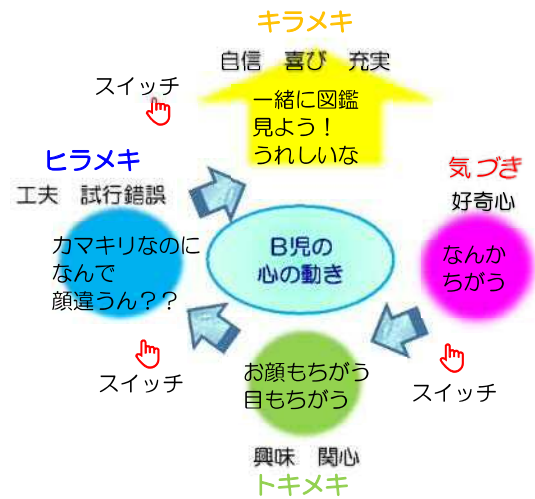


長い間飼育していた『ハラビロカマキリ』をよく見ていた子ども達だったので、違いにすぐ気づいた。

B児は初めてのクモの捕食場で衝撃を受けたが、そこからカマキリにどんどん興味や関心が湧き、魅了されていく。**トキメキ**

虫を触ることにはまだまだ抵抗があるB児だが、誰よりも毎日よく見ていた。『目が黒い』『ながい』『顔が違う』等の気づきがたくさんあると同時に、『なんで?』と疑問をもち始めた。**ヒラメキ** カマキリを通して、虫の絵本や図鑑を見ることが楽しくなり、戸外で虫探しをすることも含め遊びの視野がどんどん広がり出す。そして、友達や保育者と共感することの喜びを感じるようになった。1人遊びが多かったB児が他児との遊びを楽しむ姿も見られるようになり、大きく変わった時だった。**キラメキ**

この時期から友達の遊びにも視線が向き始め、集団での遊びが楽しくなってきた。**キラメキ**



<事例6> エーンエーンってないてる

コオロギを捕まえ、カマキリの飼育ケースに入れる。捕食する場面を見ていた子ども達が口々に話し始める。

- J:「モグモグってしてる」
- B:「なんで食べられたんやろねえ」
- J:「エーンって泣いてるでえ【擬人化】」
- E:「ちんころりんって鳴いてるわあ」
- J:「コオロギさんがエーンエーンって泣いてるよお。【擬人化】だっってこうやって食べた！」



- E:「あーあ動けなくなっちゃった」
- B:「鳴かなくなった…」
- E:「うわあ!なんか黒いのが出てきた～」
- G:「お顔から食べた」
- J:「あーあ。取れちゃった。カマキリさんが(に)せっかく捕まってたのに」
- E:「上手に食べてる 上手に食べてる」
- C:「ここに何かおるよ」(飼育ケースの端にいたカタツムリに気づく)
- L:「これカタツムリ?」
- E:「ボク(カタツムリ)が助けてあげるよ～って言うてるで」と今までになかった会話で盛り上がる。それぞれが言葉にしているようだが、子ども同士で会話を楽しんでいた。

カマキリを観察していく中でB児の「なんで食べられたんやろねえ」の一言をきっかけに、コオロギの気持ちになって会話が展開されていった。



<事例4~6の考察>

今まで、色々な虫を育ててきた子ども達はカマキリが虫を食べる場面を何度となく見てきた。**トキメキ** 始めは驚いていたが、「お顔から食べた!」「なんか出てきた～」等次第によく観察するようになった。**トキメキ** また、この頃になると【擬人化】し始め「エーンって泣いてる【擬人化】」とコオロギの気持ちになったり「あーあ取られちゃった」とカマキリの気持ちになったりすることが多くなってきた。**ヒラメキ** カマキリと出会って2か月。子ども達の中でカマキリの観察が日常となり、一人一人の心の動きが多く見られるようになった。**ヒラメキ**

<事例7> めばちこかな？カマキリ会議 ② “めばちこ”とは“ものもらい”のことです

子どもと一緒にカマキリを見ている時に、カマキリの片方の目が黒くなっていることに気づく。

片方の目だけが黒くなっていたので、色の違いがよく分かり、盛り上がっている目の一部や、黒い点等を子ども達と一緒に確認する。



「めばちこかな？」のB児の発言から他児も集まりだし、「めばちこや」「めばちこちゃう？」と騒ぎ始める。**トキメキ** B児が「目薬さしたらいいんちゃう？」H児は「注射したらいいんちゃう？」と、自分の体験をもとに、目薬や注射の話が出てきたので、N先生(看護師)を呼びに行くことになった。**ヒラメキ** 自分が今までにしてきた経験(怪我, 病気)と看病してもらった経験を重ねているのではないか。

N先生(看護師):「本当だ。目に何かできてるね」B:「めばちこちゃう？」と心配そうにしていたので、N先生(看護師)が「お薬ぬってあげようね」と言う少しホッとした様子だった。**キラメキ**

この日は、週末ということもあり保育者が子ども達に話をして、皆で保健室に連れて行き、「お願いします」とN先生(看護師)に預けることになった。

週末に子ども達の思いが離れてしまわないように、保健室に入院するという形をとった。子どもの発想に寄り添い、N先生(看護師)にも保育に参加してもらうことで、カマキリのことを我がことと捉え、それぞれがより関心をもてるように保育所全体で見守っていくことにする。

秋になり、食欲が減ってきたカマキリが気になっていた子ども達にとって、目の怪我は大事件で、とても心配していた。また、自分の経験と重なり、“目薬”“病院”“入院”等の言葉が出てきた。保健室に預ける時には、『カマキリの目が治ってほしい』という願い、期待感と、『大丈夫かなあ』と心配な気持ちが入り混じっている様子が見られた。

<事例8> 目、治ったかな？

週明けの朝、入院しためばちこのカマキリを保健室に迎えに行く。どうなったのか、“心配”“ワクワク”様々な思いでカマキリの所に行く。**トキメキ** よく見ると、黒くなっていた部分が乾いて小さくなっていた。B児が「なんか治ったんちゃう？」と気がつく。**トキメキ** それぞれに喜んで見ていた。すると、食べるものがないことに気づいたA児が「エサ捕りに行こう」と早速畑へ数人で虫を捕まえに行く。虫探しを毎日のようにしているので、ブロックを動かしたり、草をグイッと上げて根元を探したりと虫がいそうな場所も分かるようになってきた。**ヒラメキ** なかなか思うように、捕まえられず逃げられることも度々あるが、網を使い友達と互いに「ここ!」「OOくんそっち行ったよ～」と言い合って一生懸命捕まえようとする。**ヒラメキ**

C児が「食べるかなあ？」と飼育ケースにコオロギを入れるが、いざ食べられる様子を見ると「コオロギ…かわいそう」と言いながら釘付けになっている。**トキメキ**

“カマキリは元気になってほしいけど、コオロギがかわいそう”と子どもの心は複雑に揺れ動いていた。

<事例9> 見えてないんかなあ？

カメムシが背中に乗っていることに、気がつかないめばちこのカマキリを見て、B児が「見えてないんかなあ？」と心配する。**トキメキ** それを聞いたC児も「大丈夫かな？」と気にしながら見ている。**トキメキ**

また、今までにない光景に「仲良ししてるんちゃう？」等の言葉も聞かれた。**トキメキ**

カメムシを食べようとしないうカマキリを見て、目を心配しているようだ。この頃何もないところで転がるめばちこのカマキリを見ていたので、今まで以上に心配になったようだ。



片方の目が黒くなっていることに気づいたB児は、死んでしまったカマキリの目の色が黒くなることを知っていたが、片目だけが黒くなっているカマキリを見て、「めばちこ？」と自分の経験と重ねた。
【擬人化】 帰宅後もカマキリを心配し、両親にカマキリのことを話していた。いつでもカマキリの変化に一番に気づき他児へ発信したり、他児もまた「Bちゃんカマキリがさあ〜」と相談したりいつの間にか、クラスの中では『カマキリ博士』の存在となっていた。友達と一緒に、「〇〇なんかな？」とイメージを膨らませ、友達との関わりの中で“うれしい”“楽しい”の気持ちを繰り返す、心がたくさん動く経験をしながら、生き生きとした表情に変わっていった。 **キラメキ**

<事例7～9の考察>

目に傷を負ったカマキリをきっかけに子ども達が様々な思いを寄せる毎日だった。 **トキメキ**「大丈夫かな?」「めばちこちゃう?」「目薬さしたらいいんちゃう?」と2歳児なりに、自分が今までしてきた体験と重ねながら、個々で色々な思いを抱いていた。 **ヒラメキ** また、カマキリと人を置き換えて、どうしてあげたら、治るか等、カマキリの気持ちになって考える子どももいたが、この思考こそが人の痛みを感じる力につながっていくのではないかと考えた。

また保護者へも日常の取り組みを伝えていたため、関心を寄せて頂いていた。休み明けに見た目の傷が本当に小さくなっていくことで、“ちょっと治った”と安心したと同時に、看護師が“治してくれた”と喜ぶ姿があった。 **キラメキ** 一安心したので、カマキリから少し気持ちが離れるかもしれないと思っていたが、それから毎日ケースの中をのぞき込む姿があった。更にカマキリの背中にカメムシが乗っている様子を見て、「見えてないんかな?」「仲良ししてるんちゃう?」と想像を膨らませていく子ども達の『見る力』に驚いた。子ども達の心の動きがたくさん見られ、ここでもやはりトキメキ（興味・関心）とヒラメキ（工夫・試行錯誤）とが行き来していた。

その後、対応した看護師は「最近、カマキリに元気がないと子ども達から聞いていたので、真剣にカマキリの目を心配し、気持ちを傾けている子どもの姿が素敵だった」と話していた。

<事例10> おっきい〜!!



ハラビロカマキリ

保育者がオオカマキリを見つけたので、捕まえた後子ども達と一緒に見る。体が大きいことが見てすぐに分かった。「おっきい〜!!」と3種類を見比べながら、大きさ、顔、体の形の違いを見つけた子どもは口々に話し出す。「(オオカマキリ) なんかにじっとしてるね」「背中長い」「チョウセンカマキリが一番エサ食べてるね」等の気づきがあった。 **トキメキ**

知りたい気持ちをそのままにせず、一緒に考えることで次への意欲に繋げていくように心掛けた。ハラビロカマキリ、チョウセンカマキリ、オオカマキリの違いが分かるように写真を並べ見比べられるようにした。

2日後、オオカマキリが亡くなり、育てていたカマキリが亡くなるのは初体験となる。動かなくなったカマキリを見せて、どうしてあげるか相談してみた。

すると、「お墓作るー」「埋めてあげるねん」とすぐに返答が返ってきた。

ヒラメキ

子ども達と畑に行き、お墓の場所を決める。穴を掘った土の上に置かれたカマキリをじっと見ていた。

「ばいばい」「元気でね」「お空で遊んでね」「涙がでそう」

また、「うれしい」と「悲しい」を言い間違えたのか、それともお墓ができて「うれしかった」のか、とても悲しい表情をして「うれしい」と話していた子どももいた。

オオカマキリ



チョウセンカマキリ

<事例 11> なんか長いのがあるよ～



飼っていたチョウセンカマキリの飼育ケースを掃除している時に、前日にはなかった物がふたについていた。「なんかついてる」「長いのがあるよ～」「かたい」抵抗なく触れた子どもが、「固い」ことを、他児にも知らせに行く。**トキメキ**

図鑑を見て、子どもと一緒に“何か”を探す。実物と写真を見比べて同じ物を見つけた。“卵”ということが分かり、友達と一緒に実際の卵に触れ、間近で見て、友達と共感できるようにした。

これが初めてのチョウセンカマキリの卵の発見となった。

<事例 12> チョウセンカマキリの産卵

カマキリを見ていた子ども達が、動きが鈍くなっていくカマキリに気づく。「お尻からなんかでてきてる～」「なにになに～??」「うわぁ…」「たまご?」「たまごやん」「白いの出てる～」「お尻が動いてる」「何か小さいのもでてるやん」と産卵をしていることに気がついた子ども達と一緒に見守る。保育者も、子ども達も初めて見るカマキリの産卵にしばらく釘付けになっていた。**トキメキ**

改めて、子どもの観察力のすごさに驚くと共に、保育者も産卵場面を初めて見たので、感動し合った。子どもの気づきを大切にし、認め、共有、共感していった。



産卵中の様子

<事例 13> ハラビロカマキリの卵

飼育ケースの掃除をしている時にふたの裏に、黒と白の模様の丸い物がついていることに気づく。最初は何か分からずじっと見る子どもと考える子どもがいる。「卵かな?」**トキメキ** B児と図鑑と一緒に探すとハラビロカマキリの卵だということが分かった。**ヒラメキ**

チョウセンカマキリの卵とハラビロカマキリの卵は形や色が異なる物だと分かった。子どもの気づきに共感しながら、形、色の違いも一緒に確かめていった。

<事例 10～13 の考察>

カマキリの産卵を見て、“これ何?”と疑問に思う気持ちの中に“面白い”“不思議”“怖い”“気持ち悪い”等様々な思いを抱く姿があった。お尻から泡のような物が出てきているように見えた卵は、実際に手に触れると固かった。**キラメキ** まだまだ触ることに抵抗のある子どももいたが、友達が触る様子を興味深そうに見ていた。**トキメキ**

実際に継続して飼育することで、カマキリの種類による大きさの違いや、産卵場面、卵の発見等を子ども達が自ら気づくことができた。興味が日に日に深まっていく子どもや、まだ関心が薄い子ども、楽しそうにしている友達の姿を気にし始めた子どももいた。20人それぞれが生き物への思いに温度差はあるが、それも子どもの姿であり温かく見守りたいと考えている。

<事例 14> B児の相談



B児が家で捕まえたカマキリを持ってきて話したいと言い出したので、皆に相談する機会をもった。**キラメキ**

B:「みんなに相談したいことがある。Bのカマキリと(みんなで飼っている)カマキリを戦わせたい」

話を聞いた子ども達はどのように返事をしていいのか分からない様子だったので、保育者が「Bちゃんのカマキリが負けてしまうかもしれないけどいい?」と尋ねた。返事はなかなか出なかったが、しばらくすると、

「やられるかもしれないけど、戦わせてみたい」と返事があった。**ヒラメキ**

B児の戦わせてみたいという強い気持ちを受けとめ、もし負けてしまいそうになった時は助けてあげてを約束して、同じケースに入れた。

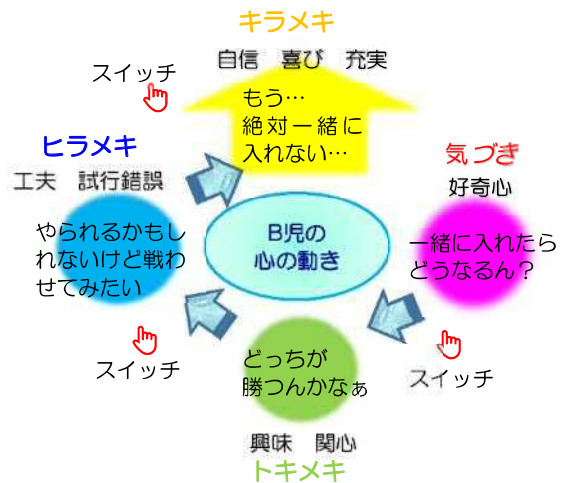
B児の盛り上がる気持ちとは対照的に、他児は困惑した様子でB児を見ている。

B児の了解の元、背中にマジックで印をつけB児のカマキリが分かるようにした。

一緒に入れてから約10分後、B児のカマキリの首に、もう1匹が噛みついたので慌てて離す。B児の表情は強張り、「違うお家に入れる」と気まずそうにその日の内に持ち帰った。

それから二度とカマキリを持ってくることはなかった。

母にその後の様子を尋ねると、「Bちゃんのカマキリ弱かったわ」と笑っていたようで、その様子を聞いて保育者としてB児が落ち込んでいなかったと知り安心した。



休日も両親とよく虫探しをしていたB児。自宅で大切に飼育していたカマキリはB児の中では“特別”なカマキリだった。後で聞いてみると、『きっと、自分のカマキリが勝つ』『同じ種類のカマキリだから戦っても、食べられない』(戦いごっこの感覚)と思っていたようだった。**ヒラメキ**

春は、保育者や友達と遊ぶよりも、ひとりで好きな遊びをすることが多かったB児だったが、カマキリを通して友達と会話すること、共感することを経験し、『友達が好き』『もっと遊びたい』と心が動いていった。**キラメキ**そして、同時に『カマキリ博士』の存在になったことで友達から認めてもらう経験をし、自信がついた。半年以上経った今、B児の姿は大きく変わりクラスの中で“自分”がどんどん出せるようになっていく。**キラメキ**

B児は、虫に触れることには人一倍怖がったが、興味は誰よりも深く、「気づき」から「トキメキ」へのスイッチが入りやすかった。またそこに、周囲の人的な力(主に家族からの後押しや友達からの尊敬)が加わることで、大きく自信や喜びを経験し、また新しい「気づき」「トキメキ」「ヒラメキ」を繰り返しながら、成長し「キラメキ」へと輝いていく姿が見られた。

<事例 15> チョウセンカマキリさんありがとう



産卵後、チョウセンカマキリがエサを食べようとせず、元気がなくなる。今まで一番よく食べて強い印象のカマキリだったので、元気がないことにすぐ気がついた。

B: 「お腹痛いかな?」

夕方までは、カマキリの尾角がかるうじて動いていたので様子を見ることにする。

2歳児としては、“動かないこと”が“死”には直結せず、自身の体験が主となり「食べられないこと＝お腹が痛い」と想像したようだ。

チョウセンカマキリが何をしても動かなくなったことを子ども達に伝える。

「なんで死んじゃったん?」「しんどかったんかなあ?」「息ができなくなっちゃったんかなあ?」**ヒラメキ** 自分の経験と重ねている。

カマキリのお墓に、手を合わせる子どもの姿が見られた。

「(お空で)元気に遊んでね」と、それぞれがお別れをしていた。



尾角 (におい感覚子)



<事例 16> ゼリーをあげよう カマキリ会議 ③

2匹のハラビロカマキリが急にエサを食べなくなり、弱り始めた。心配そうに次々と子ども達が見に来る。

B：「お腹痛いかなあ？」

I：「おかゆあげたら？」

B：「元気がない時は、Bはゼリー飲む」

B児、I児は自分の経験してきたことと重ねてどうしてあげれば良いか考えている。そして、自分達が病気の時を思い出し、カマキリに置き換えて口々に思いや考えを話した。



子ども達の会話から、昆虫用のゼリーをあげてみようかと保育者が提案した。「あげる〜」「がんばって食べて〜」「ゼリーここだよ〜」と声をかけ、昆虫用ゼリーをカマキリの口に当てると、水分を摂る様子が見られた。「あ、ちょっと動いてる〜!!」しばらく入れ替わりたちかわり、カマキリの尾角が動く様子を見守っていた。キラメキ

この後、カマキリが動き出し子ども達と一緒に喜んだ。



<事例 17> さみしくないように



先日から弱っていたハラビロカマキリ2匹が亡くなる。動かなくなっているカマキリを見ている子ども達から「死んじゃった」という言葉が聞かれた。「動かないこと」と「死んでいること」が繋がっているようだった。死んでしまったカマキリをどうしてあげたら良いかと話をする。子ども達からすぐにお墓を作る話が出た。そして、畑に行きどこにお墓を作ってあげたらいいかと子ども達に相談をする。

すると、I児が「さみしくないように、あっちとこっちに入れてあげる」と言い出した。キラメキ I児の思いをくみ取り、以前作ったハラビロカマキリのお墓と、チョウセンカマキリのお墓にそれぞれ1匹ずつ入れることになった。「カマキリさんうれしいうれしい言ってるかな?」「お空で遊んでるといいね」等と話しながら手を合わせた。キラメキ

今回は弱っていく過程を見ていた子ども達だったので、カマキリが死んでしまったことをしっかりと理解した様子だった。

以前亡くなったカマキリがさみしくないように一緒にに入れてあげたいという子ども達の優しさに保育者は胸がいっぱいになった。



<事例 18> “元気になあれ”



最後の1匹のハラビロカマキリは、秋になり、寒くなるにつれ元気がなくなってきたので、一人一人が「元気になあれ」とエールを送った。キラメキすると不思議なことに、ほとんど動かなくなっていたカマキリが右カマを動かし起き上がろうとした。ティッシュにしがみついたカマキリの様子を見て、応援が届いて動くようになったと感じる。子ども達も「わあ」「うごいたあ」と驚くような声と表情で見続ける。キラメキ

驚くほどの回復に、皆の思いがカマキリに届いたことを子ども達と喜び合った。

この時、みんなで「元気になあれ」とエールを送り、そのエールが届いたかのように、カマキリが動き出した様子を見て感動する。感動には個人差があるものの、皆の心がひとつになる瞬間であった。

実際に声をかけた後に動き出したので、「うれしさ」や「不思議」「期待」が個々の心に色々な感情として、表れていた。



<事例 19> また元気になるかな

前日復活したものの、最後の 1 匹のカマキリが亡くなった。ただ、前回の 2 匹のカマキリとは大きく違った。亡くなったカマキリにあまり寄ってこない。数匹のカマキリの死を見てきたから慣れてしまったのだろうか。

カマキリが死んでしまったことを伝えても、今までの反応とは違ったため、一旦集まって「カマキリが動かなくなったけど、どうしたらいい？」と聞いてみた。

すると、意外な答えが返ってきた。

B：「元気になってねって言ったらいい」 **ヒラメキ**

その話を聞いた数人が、「元気になってね」と言うが、もちろん昨日のように動かない。それでも、前日元気になったカマキリを見たので、また元気になると思う子どもが多かった。

昨日のカマキリが元気になった印象が大きかったので、カマキリの死に慣れたからではなく『また元気になってくれる』と思っていたようだ。

しかし、何をしても動かないカマキリを見て“死んでしまった”と捉え始める。



<事例 14～19 の考察>

事例 16, 17 では、心配した子ども達と相談をし、弱ってきた 2 匹のカマキリにゼリーをあげたものの、翌日には死んでしまった。弱っていく様子を見ていたので、死んでしまったことを理解した子どもがほとんどだった。

しかし、事例 18 では、実際に「元気になってね」と皆で声をかけた後に動き出したカマキリを目にした。元気になったカマキリの姿を皆で喜び合い、クラスが一つになったと感じた瞬間だった。そのため事例 19 では、事例 18 の経験から“動かなくなったカマキリにも声をかけたら元気になるんだ”と思った 2 歳児の心の様子があり、カマキリの死を伝えても「元気になってね」って言えばいいと信じこんでいた様子だった。

ところが、実際はそうではなかったことを何度話しても、『でも「元気になってね」って言えばいいやん』と死んでしまったことが“なんで？(元気になってと言えば元気になるのに)”と受け止めきれない子どもが多数いた。死んでしまったことよりも、「元気になってね」と声をかけて元気になったことの方が印象深かったのだと感じた。

死んでしまった 2 匹のカマキリを、お墓に入れる時には、“さみしくないように”と言って以前作った 2 か所のお墓を思い出し一緒に入れると提案した I 児の発想にも驚かされた。

2 歳児は、個々の発達の違いも大きい年齢だがカマキリを通して様々な子ども達の気づきがあった。そして、1 人の子どもの気づきがクラス全体へと広がっていった。**トキメキ** 一人一人の興味や関心が友達との興味や関心と重なり合うことで、大きな力となり“集団の力”が強くなっていったと考える。

また、子どもの思いをありのまま受け止め、主体性を育むことが遊びの幅を広げ、**ヒラメキ** 自信や喜びにつながっていくことを感じた。**キラメキ**

そして、カマキリがいなくなった後も、畑に行っては「カマキリさ～ん」と声をかけたり花を供えたりする姿が続いた。

新浜保育所の引っ越しが近づいてきた頃、「さみしくないようにカマキリのお墓も引っ越ししてあげようよ」と言う B 児の声を聞き、子ども達のカマキリに寄せる思いの深さも知った。**ヒラメキ**

③生活発表会 ～20匹のカマくん～ 12月



カマキリの飼育を通して、カマキリが身近な存在となり、カマキリの動き(獲物を狙う姿、捕食している姿、カマを磨く姿、逆さまになってつかまっている姿等)を真似て遊ぶようになった。その姿を見て生活発表会では、カマキリのお話で遊ぶことにすると、今まで見て、触れてきた虫の表現遊びが自然に始まった。

バッタの表現では跳ぶことや草を食べることからではなく、保育者の予想に反して、小さな手を羽に見立て、遊び始めた。一人の表現がまた一人へとどんどん広がっていく。



ある日、今までのカマキリの写真やエサを捕まえるシーンを編集した映像を、プロジェクターで見て振り返った。「うわぁ!黒い!」「一口食べた!!」「おててなめてる」「カマキリさ～ん!お～い」と久しぶりのカマキリに大いに盛り上がっていた。

実体験から生まれてくる表現を大切に、2歳児の目線から生まれてくる表現の面白さ、ユニークさを担任間で共有し、一緒に遊ぶことを心がけた。



ユラユラ揺れて表現することが楽しくて、虫を捕まえる遊びが始まった為、虫を作って遊びを広げていく。B児が「もっと虫いっぱいやってら(出てきたら)皆捕まえられるんちゃう?」と言うので、「じゃあ、何の虫がいい?」と聞いてみると「チョウチョ」「クモ」「コオロギ」「カメムシ」と今まで出会ってきた虫がでてくる。**ヒラメキ**早速色塗りをし、劇遊びの小道具として使うことにした。エサを捕まえられるよう、どうしたらいいかと子ども達と作戦を考えた。「静か～に近づいていって、サッと捕まえたら?」「ユラユラする!!」「見つかったら隠れる」「高～くジャンプジャンプする!!」と早速虫を捕まえる遊びが始まった。**ヒラメキ**



ここでもカマキリの飼育経験が生きている。

“楽しい”“面白い”“またやりたい”“もっとこうしてほしい”等、子どもの思いを受け止め、主体的に遊ぶごっこ遊びにつなげていく。今までカマキリが捕食してきた虫(=実体験)が思い浮かんだようだ。

カマキリの卵も実際に手にして見ていたので、カマキリが卵から産まれてくる映像を子ども達と一緒に見てみる。「うわぁ!!いっぱい!!」「つながってるなあ」「ちっちゃいねえ」と様々なことに気づく。



そこで大きな段ボールを用意し、カマキリの卵を作る。「赤ちゃんどうやって生まれてきたかな?」と聞いてみると、I児が「え?こうやって」とI児は、ハイハイで出てきて見せてくれる。他児も続き、どんどん段ボールをくぐって出てきた。皆で中に入って顔を見合わせながら、笑顔がいっぱいだった。



『この虫狙ってんねん』『逃げようとしてんねん』とカマキリの帽子、草、虫、劇中の背景等、生き物に触れてきた経験が制作活動の中でも生かされ、たくさんのイメージがあふれていた。

<②③の取り組みを振り返って>

「この石カマキリの形(顔)してる」「大きくなったらカマキリになりたい」「(全身緑の服を着て)カマキリになってきた」「あれ卵ちゃうん?」等、生活発表会が終わった後も子ども達が遊んでいる世界にはずっとカマキリがいる。また“おおかまきりの一生”の絵本の中の、セミを捕食する場面を見た時は、まさか自分たちの大好きなセミが食べられるとは思ってもおらず目を丸くさせ、息をのむ様な表情を見せる子どもがたくさんいた。秋になり“おおかまきり”が死んでしまう場面はC児が「目が黒い」とつぶやく姿があった。死んだら目が黒く変化することを、自ら学んでいたことに驚かされた。

また、コオロギとカマキリと一緒に飼育ケースに入れている時に、カマキリが食べ残した虫の死骸をコオロギが食べている所や、カマキリのウンチを食べている様子を見て、「わぁ!ウンチ食べてる」「コオロギ、ウンチ食べてどうすんの」と驚く子ども達の姿があった。そして、コオロギは何でも食べるのだという気づきがあった。

生活発表会を通して、身近な生き物だったカマキリに自分達がなってみることで、「僕は、クモ食べてみたい!」「カマキリさんお散歩に行きたい言ってるんちゃう?」「カマキリってどこで寝るん?」等想像し、擬人化しながら遊ぶ姿が見られた。保育者が教えたり、見本を見せたりするのではなく、本物を見た子ども達から生まれる表現力や発想力はすばらしく、大人の想像をはるかに超えるものであった。

IV 課題と今後の方向性

今回の取り組みで、子どもの『気づき』をきっかけに、興味・関心の扉が開き、その『気づき』に『トキメキ』へのスイッチ(=きっかけ)が入ると、その『トキメキ』が、創意工夫・試行錯誤の『ヒラメキ』へと変化し、自信・喜び・充実に満ち溢れた『キラメキ』へと変わっていく姿を感じることができた。しかし、日常の『気づき』の多くは、必ずしも『トキメキ』につながらず、『気づき』のままで終わってしまうようにも見えたが、それは決して無駄なことではなく、心の中に蓄積されその後の『トキメキ』へとつながっていくこともあった。

また、『気づき』が『トキメキ』へと変わるには、まず虫を好きになることから始まり、そこに、「したい」「なぜ?」「どうなる?」等の主体的な要素や保育者・友達との関わりが加わることで、スイッチ(=きっかけ)が入り『気づき』は『トキメキ』へと変化していった。

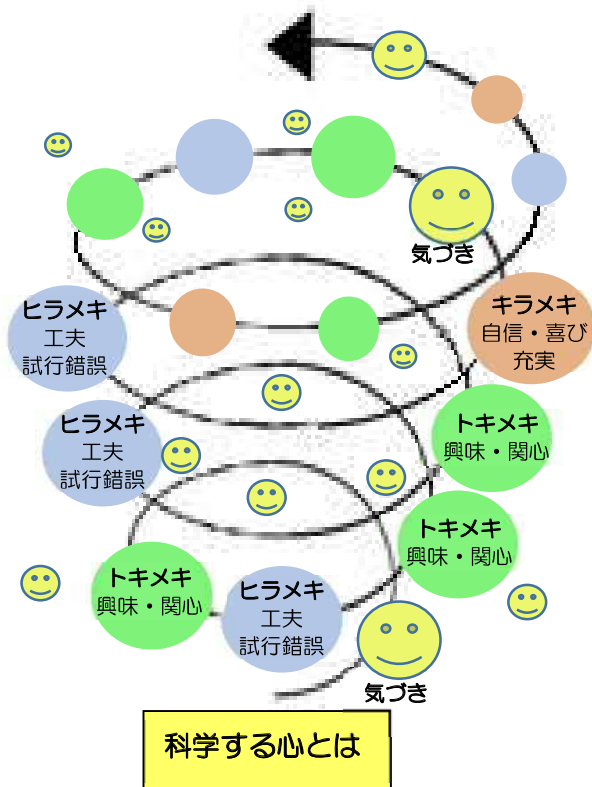
そして、『トキメキ』は、その後『ヒラメキ』『キラメキ』へと順に変化していくこともあるが、『トキメキ』と『ヒラメキ』を何度も繰り返しながら『キラメキ』へと変化する姿も多くみられた。それは、保育者や友達、家族等周囲の人の力でより深まり、より意欲が高まっていくことが分かった。そして2歳児であったとしても、一人一人の興味や関心が友達の興味や関心と重なり合い、「カマキリが元気になった時(事例18)」や「発表会の取り組み」のように、“皆がひとつの方向を向く”“気持ちを通じ合う”等の**集団の力**として発揮されることもあった。

また、2歳児が生き物と関わっていく中で、生き物の気持ちに自己の感情を投影すること【**擬人化**】は、相手の立場になって物事を考える力や思いやりの心、豊かな心につながる経験である。今回の取り組みで、それらの全てが『科学する心』を育むのだと実感した。

しかし同時に見えた課題もある。1つは、2歳児に生き物の生死を見せるということの賛否だ。生死を見せることは、子どもの心に影響があるのではないかと心配していたが、ある日の給食時、お皿の中の調理された魚を見て「(僕も)死んだお魚食べてる。カマキリと一緒にや」と言う子どものつぶやきを聞き、2歳児なりに生命の連鎖を受けとめていると感じた。

賛否については、保育者が正解を導き出すのではなく、今後3,4,5歳と年齢を重ねていった子どもの姿に答えが見られるのではないかと考えている。

そしてもう1つは、環境的な課題である。2021年度から164名の西蔵こども園となり、職員数も44名から、60名へと増えた。14時降園の1号認定子ども(幼稚園部)と19時までに順次降園の2,3号認定子ども(保育所部)が、同じく



ラス内に在籍し、多種多様な教育・保育環境になったことで、職員が顔を揃えて話し合う時間が、2020年度よりも極端に減ってしまった。細かい伝達ルートを作り、各々で声を掛け合いながら、時間の捻出を模索しているところである。

新浜保育所は2020年3月末で閉所となり、4月からは新たな場所で西蔵こども園として開園した。真新しい建物や、初めての2階建ての施設に大喜びだった子ども達が、いつものように戸外遊びで虫探しを始めると、新しい施設、新しい園庭がゆえに、「ダンゴムシ」や「幼虫」をなかなか見つけることができなかった。「むしさん、いないねー」の子ども言葉から、あらためて新浜保育所が、たくさんの小動物の住処であったことを実感させられることとなった。

しかし、そんな子ども達は、登園時に見つけた様々な虫を持ってきて、新しい園庭に放すという行動に出た。それはこの取り組みに関わった子ども達だけでなく、4月に新しく入園してきた子ども達へも広がっている。現在も朝から「先生、見つけてきたよ！」と握りしめた手からダンゴムシが出てくるという光景が続き、数少ない貴重なダンゴムシをみんなで大切に観察している姿が見られる。また、小さなカマキリの赤ちゃんを見つけると、子どもたちは、早速排水溝の下をのぞき込んだり、水栓のふたを開けてみたりして、カマキリのエサになる小さなクモを探している。生活の場が変わっても、「生き物が好き」という気持ちに変わりがないことを感じている。

今後も西蔵こども園が新浜保育所と同じようにたくさんの小動物の住処となるような環境作りに取り組み、「動植物に親しみ、様々な命の大切さに気づき、感動する心」が育ってほしいと願っている。

2020年度、2歳児だった子ども達が、西蔵こども園の新しい環境で、年齢を重ねていくうちに、好きなことと出会い、『気づき』『トキメキ』『ヒラメキ』『キラメキ』を繰り返しながら、「科学する心」がどのように育まれていくのかを追っていきたい。

そして、西蔵こども園で、たくさんの子ども達と小動物が共生し、歴史を刻んでいくとともに、今後もこころ豊かな子ども達をめざして、ときめいて、ひらめいて、きらめいていける教育・保育を提供していきたいと考えている。

研究代表者名 西尾 裕子

執筆者名 泉 美由紀，藪田 真理子，上岡 朱里

